

「街を守る」見つけた命題

東京都内で建設コンサルタントとして働く田中麻琴さん(27)川崎市は、地方自治体が取り組む事業に対する支援が主な仕事だ。

地方財政が苦しさを増す中、例えば、公園を造る時にレストランや売店を誘致し、その収益を整備に活用する一

などの手法もその一つ。英語より数式を使う職場で、肩を並べるのは土木建築などが専門の理系大学出身者だ。「A

IUの特徴とは違うかもしれないけれど、秋田で学んだことがこの道に進んだきっかけなんです」。言葉に気負いは

ない。出身は秋田県全体の人口を上回る川崎市。幼いころ、母の実家がある京都の田舎町に

遊びに行くと、何だか居心地がよかった。織物が有名で、古い町並みが残る。「独特な雰囲気」に興味があり、田舎と都会の比較」を自由研究のテーマにしたことも。「伝統文化に引かれていたのかな」と振り返る。

田中 麻琴さん (27)

2020年卒、建設コンサルタント

中学生の時にテレビ番組で特集されていたA IUに行けば、「世界の文化を知ること

ができる」と思った。海外への憧れは強まり、高校生になって初めて見学した大学もA IU。国の重要無形民俗文化財が全国最多という秋田の土地柄も魅力的に映った。

民間企業と大学が連携したモニターツアーに参加して遺跡や文化を観光資源にする取り組みを考えたり、重要伝統的建造物群保存地区に選定されて

いる横手市増田町で研究したり。在学中の活動で見えてきたのは、地域に守られてきた伝統文化の奥深さと、少子高齢化や人口減少にあえぐ秋田の現実だった。

「魅力的な地域文化も、消えてしまいかねない。危機感というか、世の中の見方が変わった」。同時に、どうしたら大好きな街を守っていける

のかという新たな命題を得たと感じた。経済学や統計学を学べるタイの大学を留学先に選んだのは、突破口を見つきたいと考えたからだ。

開発が地域によってまだら模様の現地では、インフラ整備が人々の生活を向上させていることを実感しながら、路上の商店などを巡った。文化財やインフラなどの「ハード」と祭りや伝統産業などの「ソフト」が両立する都市空間をつくり、「文化を守る助けになりたい」。英国の大学院を経て「エイト日本技術開発」(東京都)に技師として就職

したのは、そんな思いからだ。「A IUで地域を意識することができた。秋田とタイという、私の二つの『古里』が、その道を教えてくれた」

月に何度も地方都市に出張し、計画を提案する。言語力や国際感覚が衰えないかと不安になる時には、卒業生の近況を交流サイト(SNS)でたどってみるといふ。一緒に入学した友人は、秋田に残って事業を立ち上げ地域の活性化に尽力している。

「方法が違っただけで、街を思う気持ちは一緒。みんなが心地よく過ごせる空間づくりに関わっていたい」。今はそう思っている。(三浦正基)



「A IUで出会った『古里』で学んだことが仕事につながっている」と話す田中さん(左)東京都中野区の「エイト日本技術開発」東京支社

いま
先輩たちは
国際教養大20年 ⑤